

「ふうっ……。んっ……。お客様……。私の胸、楽しんで頂けているだろうか？」

「んっ」

可児江くんが天プリリアントソープの開園を指示してから30分後には、私に1人の客が付いていた。

どこから得た情報なのか分からないけど可児江くんは、私のプロフィールに「いすずちゃんは、お風呂がだいすきなんだミー！ぼいんが弱点だロン！」なんて書いていた。



「ん~~~~、ちよつと期待はずれかなあ~~~~。

もうちよつとヒロ~~~~く、頑張ってもらえないと、

オジサン興奮しないなあ~~~~。

オジサンをもつと、もお~~~~つと興奮させてもらえれば、

たあ~~~~くさんオポジション付けちゃつて、

延長バンバンしまくつちゃうのになあ~~~~」

「りよ、了解……したわ。もつと、ヒロく、ヒロく……」

しかし、私が少しでもこのパークのためになることが出来れば……

ラティファ様のためにも……そして、可児江くん。

あんなに毎日頑張っている、彼のためにも。

「んっ・・・ふうっ・・・
きしゅっ！きしゅをっ！
いただけないだろうかっ！」

「まったく、いすずちゃんは
甘えんぼうで仕方ないなあ。
ほら、オジサンの唾液を
お腹いっぱい飲むんだよ」

「じゅっ・・・ぐんぐんぐんぐん！
飲みましゅっ！
ゲスト様の唾液、
残さず飲ませて頂きましゅっ！」



私の心も身体も、
支配してくれるような、
男のひと。

「奥の方にもっ！奥の方にもきしゅ！きしゅの許可をっ！」

「奥ってどこの奥なのかなあ~~~~？」

オジサン、エリートでもなんでも
ないから分かんないなあ~~~~

いすずちゃん、さつきちゃんと教えたよね？

いすずちゃんの一番イイところはどこですかあ~~~~

だめ軍人のいすずちゃんあ~~~~ん」

「まんこですっ！」

いすずのまんこの奥にきしゅんなわさ-

軍人まんこに平民ちゃんぽでおしおきしゅんなわさ-

だめ軍人まんこごめんしやいっ！」

私の心も身体も、
支配してくれるような、
男のひと。

「奥の方にもっ！奥の方にもきしゅ！きしゅの許可をっ！」

「奥ってどこの奥なのかなあ~~~~？」

オジサン、エリートでもなんでも
ないから分かんないなあ~~~~

いすずちゃん、さつきちゃんと教えたよね？

いすずちゃんの一番イイところはどこですかあ~~~~

だめ軍人のいすずちゃんあ~~~~ん」

「まんこですっ！」

いすずのまんこの奥にきしゅんなわさ-

軍人まんこに平民ちゃんぽでおしおきしゅんなわさ-

だめ軍人まんこごめんしやいっ！」

「うおおおう・・・」

「ミユースちゃんの膣内はヌルヌルだねえ・・・」

「さすが水の精霊」

「そ、そんなことつ！
言わないで良いです？」

「ミユースは真面目っ子だけど
毎日一人でしちゃってるからな！」

「サーラマちゃん、それホントかい？」

「当たり前じゃん」

「好き勝手っ・・・
んっ・・・言わないでよっ・・・」

「ゲスト様もっ・・・」

「サー、んっ！ラマっ・・・もっ！」



「うおおおう・・・」

「ミユースちゃんの膣内は

ヌルヌルだねえ・・・」

「さすが水の精霊」

「そ、そんなことっ!

言わないで良いです?」

「ミユースは真面目っ子だけど

毎日一人でしちゃってるからな!」

「サーラマちゃん、それホントかい?」

「当たり前じゃん」

「好き勝手っ・・・」

んっ・・・言わないでよっ・・・」

ゲスト様もっ・・・」

サー、んっ!ラマっ・・・もっ!」



「うおおおう・・・」

「ミユースちゃんの膣内はヌルヌルだねえ・・・」

「さすが水の精霊」

「そ、そんなことつ！
言わないで良いです？」

「ミユースは真面目っ子だけど
毎日一人でしちやってるからな！」

「サーラマちゃん、それホントかい？」

「当たり前じゃん」

「好き勝手っ・・・
んっ・・・言わないでよっ・・・」

「ゲスト様もっ・・・」

「サー、んっ！ラマっ・・・もっ！」



「うおおおう・・・」

「ミユースちゃんの膣内は

ヌルヌルだねえ・・・」

「さすが水の精霊」

「そ、そんなことっ!

言わないで良いです?」

「ミユースは真面目っ子だけど

毎日一人でしちやってるからな!」

「サーラマちゃん、それホントかい?」

「当たり前じゃん」

「好き勝手っ・・・」

んっ・・・言わないでよっ・・・」

ゲスト様もっ・・・」

サー、んっ!ラマっ・・・もっ!」



「今度はサーラマちゃんに……
お、おおっ……
サーラマちゃんの膣内は
アツアツだあ……」

「ん……はあ……
待ってた時間も長かったし、
ほんとコレだるいなあ……
さっさと出しちゃってよ、
写真撮って、
こいつ変態だーって拡散しちゃうよ」

「なんかサーラマちゃんのダウンナーな感じ、
いいよ、いい……
膣内もなんか、
とろとろに煮込まれてるみたいだ……」

「はあ……ほんとキモい」



「今度はサーラマちゃんに……」

お、おおっ……

サーラマちゃんの膣内は

アツアツだあ……」

「ん……はあ……」

待つてた時間も長かつたし、

ほんとコレだるいなあ……

さっさと出しちゃってよ、

写真撮って、

こいつ変態だーって拡散しちゃうよ」

「なんかサーラマちゃんのダウンナーな感じ、

いいよ、いい……

膣内もなんか、

とろとろに煮込まれてるみたいだ……」

「はあ……ほんとキモい」



「今度はサーラマちゃんに……」

お、おおっ……

サーラマちゃんの膣内は

アツアツだあ……」

「ん……はあ……」

待つてた時間も長かつたし、

ほんとコレだるいなあ……

さっさと出しちゃってよ、

写真撮って、

こいつ変態だーって拡散しちゃうよ」

「なんかサーラマちゃんのダウンナーな感じ、

いいよ、いい……

膣内もなんか、

とろとろに煮込まれてるみたいだ……」

「はあ……ほんとキモい」



「よ、よろしく・・・お願いします」

「おたのみもうしたー！！！！！！」

な、なんでこんなことになつてしまったんだらう・・・

可児江さんが急に現れて、

「天、フリリアントソープ」

なんて言うっちゃって、

私、シルフィーさんと二人で、男の人の前で、こんな、こんな格好しちやってる・・・



「し、シルフィーさんっ」
「ぶいっさんっ」

ダメだ・・・

完全にオプシオンで使うための
機械で遊んじやつてる・・・

今から、私達、このおじさんに

「され、ちやうのには・・・」

シルフィーさん、

イヤ！とか、怖い！とか、

ないのかな・・・

「「ホリー、ちゃんだっけ？」

そんなんいい？心の準備できた？」

でも、これ以上ゲスト様をお

待たせしちやいけない・・・

「は、はい。いつでもだ、だいじょうぶです」

「ほっちゃん——う——」





「それじゃまぼほシルフィーちゃんに・・・」

くっ、くっ、おおっ、これはっ、ふわふわでもりながらっ、

キュッと締め付けられる感じだっ」

「んっ ふふっいんふふふー」

シルフィーの中、どーですかー？」

「ふわふわっのっのっで最高だよ・・・」



「それじゃまずはシルフィーちゃんに・・・」

くっ、くっ、おっ、おっ、これはっ、ふわふわでもりながらっ、

キュッと締め付けられる感じだっ」

「んっ ふわっ、んふふふっ、
シルフィーの中、どーですかー？」

「ふわふわっ、ん、ん、最高だよ・・・」



「それじゃまずはシルフィーちゃんに・・・」

くっ、くっ、おっ、おっ、これはっ、ふわふわでもりながらっ、

キュッと締め付けられる感じだっ」

「んっ ふふっ、んふふふっ、
シルフィーの中、どーですかー？」

「ふわふわの心地で最高だよ・・・」

「じゃあ次は、この！」

可愛い「ポリリーちゃんのお尻に入れちゃうね」

「んんっ！お、おきやくさま、そんなしつかりおしり挿んで、
や、優しく、お願いします・・・優しく、ですよ」

「はいはい、うわ・・・ごっちは小さくて

ぎゅんぎゅんキツクくっくら締め付けてくる・・・

あー、先に謝っとくね「ポリリーちゃん、

これ我慢できそうじゃないわ、おじさん限界」

「ん、んんっ、んんっ、げ、限界？限界、って・・・

ひうっ！おっ、おきやく、おきやくさまっ！

はっ、はやっ、はやすぎっ、優しく、やさしくっ、てっ！

んんっ、わらっっ、お、お尻、壊れちゃうっ！



「じゃあ次は、この！」

可愛い「ポリリーちゃんのお尻に入れちゃうね」

「んんっ！お、おきやくさま、そんなしつかりおしり挿んで、
や、優しく、お願いします・・・優しく、ですよ」

「はいはい、うわ・・・ごっちは小さくて

ぎゅんぎゅんキツくくっらに締め付けてる・・・

あー、先に謝っとくね「ポリリーちゃん、

これ我慢できそうじゃないわ、おじさん限界」

「ん、んんっ、んんっ、げ、限界？限界、って・・・

ひうっ！おっ、おきやく、おきやくさまっ！

はっ、はやっ、はやすぎっ、優しく、やさしくっ、てっ！

んんっ、わらっっ、お、お尻、壊れちゃうっ！





ークラスメイトの中城さんがバイトしてるって聞いたから、
地元にある気まぐれに古くてボロイ遊園地に来てみたら
こんなことになるなんて……

「へへ、な、なんか照れちゃう、ね。XXくん、わたしも脱いじゃうね」

ーう、うおお!?俺がテンパってる間に、
中城さんの乳首が!

いつも妄想してオナニーしてた中城さんの乳首が目の前に……!

「XXXくん？ちよっ、ちよっど、XXXくん？うわっ！」

中城さんの胸を見ただけで、ぼ、暴発してしまった・・・これは男として最低だ・・・

「ッ」

「えっ、っ、XXXくんって面白いね」

（中城さん、可愛いっ！っこれはすぐ復活しそうだ！）

「ふんごうのこと初めてで、照れちゃいますね」

美衣乃ちゃんはごうという仕事は初めてらしく、

少し照れながら俺を、古びた遊園地の管理棟の一室へと案内してくれた。

美衣乃ちゃんに会ってからというものの、俺はとてつもなく、過去最大級に、
全身に血が沸騰しているのを感じていた。

「こんなポーズって、アイドルさんみたいですね」
「慣れてなくてすいません。今日も「うぞー！」って、お兄ちゃんに心配されちゃって」

「ぜ、ぜんぜん、大丈夫、だよ」

こんなソフトなポーズなのに、いつもよりめっちゃくちゃ興奮してしまっ。

昔から俺も結構、こういう遊びはしてきた方だけど、
こんなに心臓の鼓動を一拍一拍感じた事なんて……

そっいえば俺、さっきから胸が痛いな……

「私をご指名いただきまして、ありがとうございます！」

「昔から、ファンだったんですっ！」

AV、アニメルビデオの時からっ！」

すぐくエロい声で動物の交尾を

実況なんてしちゃうからっ！」

ずっとそれ聞きながら1人でしてましたっ！」

「ああああ、

それでは今日は私といっしょばい、

どうぶつさんの交尾を♪

しなければいけませんねっ♪」





「私のなかでっ♪どんどん生殖器が♪
大きくなって行きますね♪」

「人間の生殖器は興奮すると亀頭が大きくなって、
射精するとメスの子宮にどばどば♪って
精子を撒き散らしちゃうんですよ♪」

「映子さん、そんなエロいことを
そんな良い声で言われたら
もっぴゅっぴゅっしますっ！」

「……」

「お客様は、本当にこのようなもので興奮なさるのでしょうか」

「ええーアーシエさん、本当にすばらしい身体ですー！

このトリケム、思わず前屈みです」

「もう少し腰を下げて」

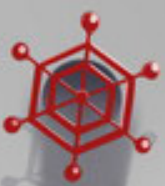
「はいでしようか」

「こちらを靈感的な瞳で見つめてー」

「はいでしようか」

「トリケム・ピエール・ド・カール」

「……………はぁ……………」



「神が作られた美に美しい女性の生殖器があるがままの形でお客様に見て頂くことでこのパークの美しさを婉曲的に！表現するのです！」

「は、はあ……」

「さあ！このように股の間から逆ピースで！さあ！」

「おおおおおおおお！このトリケン！」

アーシエさんの美しさを思わず！

我が一族に伝わる聖なる液体を発射してしまふそうです！」



「いやあ、まさかパークの様子を見に来てみたら、

オヒメサマの身体を頂けるなんて思いませんでしたよ」

「わ、私は、このパークと可児江さまのためにならと……きやつー！」

可児江さまが突然私の元にいらつしやつたのはついさっきのことぞ、

可児江さまは

「ラティファ様、パークのことを本当に想っているなら、

なんにも言わずに、今から来る人に全部、

ぜえんぶ、任せるミィー！」とだけ仰つたのですが……

わたくしの身体が、見えないゲスト様によって、
もうわたくしの身体ではないことが分からされるまでには、
20分もかかりませんでした。

「やつ、あつ、このままではつ、わたくし変につ!!」

変になってしまいましたっ!! 可児江さまっ!! 可児江さまっ!!」

「うわー、もうぐっちやぐちや、お腹の方もだらしなく下がつて

まじってるじゃないですかオヒメさま、

そういう時は『イク』って言うんですよ。

それが上流階級の嗜みっつてもんです」

「イクっ、イクうっ!! イクの、したいですうっ!!」

